

京都府立東舞鶴高校における連携授業

「古写真から見る近代の舞鶴」

渡邊 幸奈

はじめに

2023年度、文化情報学研究室では地域貢献型特別研究（ACTR）「京都府北部のMALUI連携による文化資源を活かした地域づくり」（研究代表者：東昇）の一環として、京都府立東舞鶴高校において連携授業を実施した。授業は計2回実施し、「古写真から見る近代の舞鶴」と題して、昭和初期～50年代の舞鶴の写真を題材に生徒それぞれが独自のテーマで調べ学習及び成果報告を行うことで、地元舞鶴の歴史や文化に対する興味関心を高めることを目標とした。参加者は、本学教員東昇と文化情報学研究室の院生・ゼミ生、東舞鶴高校の地歴・公民科の山本達也先生、荒谷剛先生、山田陸人先生、同校の2年4組日本史探究の受講生15名である。

以下、各回の授業概要、及び高校と大学間の連携における今後の展望についてまとめる。

1 授業の概要

(1) 2023年11月20日の授業（授業時間100分：2時間分）

第1回の授業では、まず、東舞鶴高校の視聴覚室において文化情報学研究室、及び授業の流れについてパワーポイントを用いて生徒に説明した。文化情報学研究室については、普段学内で行っている古文書の調査・整理や学外調査の他、SNSを用いた情報発信、同研究室が中心となって公開している「まるまる舞鶴」の概要・使い方などについて紹介した。

その後、図書室に移動し、生徒2～3名+学生1名の6グループを作り、それぞれ学生の進行のもとグループワークを行った。各グループはそれぞれ異なる写真1枚を題材として、「まるまる舞鶴」やその他の検索ウェブサイト、図書資料などを利用しつつ、写真から読み取れることについて調べ、グループ内で共有した。なお、写真は廣瀬邦彦氏の御教示により『ふるさと舞鶴』（加藤晃監修、郷土出版社、2013）、『写真アルバム 舞鶴・宮津・丹後の昭和』（廣瀬邦彦監修、樹林舎、2021）から三条通や八島商店街の写真を選択し、山本先生を通じて事前に生徒各自が持つタブレット端末で共有して頂いた。調べ学習を行う際には、ネットリテラシーの観点から資料の引用方法と参考文献の表記方法について説明し、ネット上の情報を扱う際の注意事項について確認した。

最後に、グループワークで調べきれなかった点、生徒自身が興味関心を抱いた点などを独自のテーマとして、舞鶴の歴史や文化についてさらに調べるレポート課題を出した。課題の提出期限は2024年2月12日とし、冬休みを中心に各自で取り組むようにした。

(2) 2024年2月19日の授業（授業時間100分：2時間分）

第2回の授業は、視聴覚室において、主にレポート課題の成果報告を中心に行った。

まず、第1回の授業と同じグループ内でそれぞれ調べた内容を共有し、学生が適宜アドバイ

スをしながらか発表の準備を行った。全体発表はグループごとに1名ずつ順に指名し、パワーポイントでレポートの内容を示しながら、生徒全員が2分程度の発表を行った。全体発表終了後、何人かの生徒を指名して発表やレポート作成についての感想を述べてもらい、最後に東教授が講評を述べた。

また、グループごとに学生が進路決定や専攻決定の経緯、実際の大学生活などについて紹介し、高校生と大学生が交流する時間を15分程度設けた。生徒からは、受験勉強や進学先を決める上で重視した点などについて質問が上がった。

2 連携授業を通して

今回の連携授業では、高校生が自分自身の興味関心に基づいてテーマを設定し、題材とした写真の場所へ実際に赴いて現在の様子と比較したり、撮影当時の舞鶴の様子について他の関連資料やデータを提示しつつ自身の考察を述べたりするなど、積極的な様子が見られた。この点において、生徒それぞれが独自のテーマで地元舞鶴の歴史や文化について調べ、興味関心を高めるという授業目標をある程度達成することができたのではないと思われる。また、グループワークにおいて、歴史学の一連のプロセス、すなわち問題提起→情報（史料）収集→検証→史実の復元といった流れについて大学生が一例を示しながら紹介することで、どのようにして過去の事象としての歴史を紐解いていくのかということだけでなく、そのプロセスがより身近な地域の歴史を知る上でも有効であるということを高校生に伝えることができたと考える。

一方で、今回の連携授業では、タブレット端末を活用しながら「まるまる舞鶴」などの検索ウェブシステムを活用することを意図したが、生徒からは「自分が探している情報を見つけるのが難しかった」、「調べ方がわからなかった」といった感想が寄せられ、実際にはタブレット端末や種々の検索ウェブシステムを十分に活用することができなかつた点が課題となった。東舞鶴高校では、ICT設備の導入と活用が進められており、2022年度からは生徒一人ひとりがタブレット端末を所持している。山本先生から、ネット上の情報の信憑性をどのようにして担保すればよいのか考える必要があるとのご指摘を頂いたように、教育現場へのICT設備の導入においては、ネット上に氾濫する情報を取捨選択し、いかにして必要な、そして信頼するに足る情報を入手するのかという情報リテラシーを実践の中で養っていく必要があるだろう。

文化情報学研究室が公開する「まるまる舞鶴」のように、今日、多くの大学や博物館、美術館、さらには自治体において独自のデジタルアーカイブが構築され、所蔵資料やその他の関連情報が広く一般に公開されている。一方で、それを利用する側、特にICT設備が導入されたばかりの教育現場においては、様々なデジタルアーカイブを目的に応じて活用することは、依然として試行錯誤の段階にあると言える。そういった中で、研究機関であると同時に教育機関でもある大学が果たすべき役割の一つとして、その性質を活かしつつ、教育現場におけるデジタルアーカイブの認知と活用の促進に取り組むことが挙げられる。それは、とりわけ歴史学の分野においては、地域に伝来した文化資源の調査やデジタルアーカイブの構築などを通して、その地域で培われてきた歴史・文化に対する人々の興味関心を高めることだけでなく、ひいてはそれらを次世代に継承していくことにも繋がるのではないだろうか。